

NO.6 ■明治文学に読む武蔵野歳時記 ～徳富蘆花『みみずのたはこと』を題材として～

環境文化史学研究室 持館政敬

研究の動機と目的

人が各々持っている原風景というものは、ランドスケープの分野に限らず、様々な場所で決して無視できないほどの影響力を持っている。眼前にある景観を風景としてとらえる瞬間、その人が持つ原風景というものが多少なりともその存在感を表すのは誰にでも経験があるのではないだろうか。

それでは私の中にある原風景とは何であろうかと自問してみた時、そこには宮崎駿監督の「となりのトトロ」に出てくる風景があった。そして、驚いたことにこのアニメーションのモデルになった土地は昭和30年代の所沢、つまり実在する風景だったのだ。

昭和30年代の農村風景は、実は江戸時代から300年以上の間ほとんど形を変えずに続いてきたものである。この安定した風景を激変させたのは「トトロ」の時代の直後、1964（昭和39）年の東京オリンピックであり、この結果、膨張する都市に飲み込まれながら現代の風景へと農村はその姿を変貌していった。

この風景の変遷と同時期に同じような変化を生じているのが風俗や風習である。江戸期から昭和30年代まで安定した形式で保存されたそれは、その後の風景の激変と同時に変化を起こし、あるいは消失して現在の生活様式になった。ここに風景と風習の関連性を読み取り、風景を構成する背景にはその地域の風俗や風習が関与していると考えたのである。

今となっては当時の風景を見ることのできる写真や風景画といった視覚的資料はごくわずかしが残ってお



となりのトトロに描かれた風景

らず、研究材料としては心もとない。そこで本研究では、さまざまな民俗学の研究や報告を参考資料として、文学的な側面から研究を行って武蔵野の歳時記を編集し、それによって当時の農村風景を理解するという手法をとることにした。そして、この研究の中心においたのが、武蔵野の農村風景を写実した、作家徳富蘆花の『みみずのたはこと』（大正2年刊）である。

徳富蘆花『みみずのたはこと』とは

江戸末期、もしくは明治初期までの名所旧跡を主とした漢学的な風景の楽しみ方に対し、友人国木田独歩と共にありふれた自然景観を風景として楽しむことを提案した、特異な作家がこの徳富蘆花である。その先鞭となった彼の著書『自然と人生』（明治33年刊）は、自然風景を賛美するだけでなく、初めて「雑木林」という単語を世に広めた作品であるとも言われている。

その蘆花が晩年武蔵野の農村に移り住み、作家としてというよりは「美的百姓」として農村の内側からその風景を記述したのが、本論で用いる『みみずのたは



千歳村を流れる田川

こと』である。同著は蘆花が東京府北多摩郡千歳村字粕谷に移住してからの6年間、彼の周囲に起こった様々な出来事を写実的な風景描写によりまとめたものである。

研究の対象

本論では『みみずのたはこと』の中から「村の一年」を対象として、武蔵野および東京市中の歳時記をまとめた文献を資料として補足することで、千歳村の歳時記についての全体像を詳細に述べていく。その際、「村の一年」に記述されていない年中行事についての記述は行わないこととする。また逆に、通常年中行事に属していなくても、蘆花の目にとまり「村の一年」に記

述された風習については、類似する風習をもとに補足をしていく。後者の例としては「下肥」や「奉公人の出代り」などがあるが、説明できるほどの余白がないのでここでの記述は控える。

考察

農村歳時記の軸となっているもの

農村がその一年を動かしていく時に心棒となっているのは当然のように農事である。特に年中行事の時期は、そのほとんどが農事の多忙なタイミングを上手に避けていることから、農村にとってもっとも重要なのは農作業であり、その他の仕事や行事は二次となっていることを読み取ることができた。

たとえば、当時の千歳村は基本的に旧暦をもとに、すなわち一月遅れで動いていた。これにより端午の節句は本来ならば6月に行われるが、この月は千歳村にとって農作業の一番多忙な月でもあった。この場合優先されるのは上記のとおり農作業となるので、結果的に端午の節句は5月に繰り上げられるのである。

また、農村地域は4月に婚姻が結ばれることが多いという現象も農事を優先した結果で、これは江戸時代から続いてきた風習のひとつである。嫁を秋口に迎えられるのは、ただでさえ少ない冬の食料が損である。また、5月からは農作業その他で忙しくなる。嫁ぎ先にとっては労働力が1人分増えることになるので、5月より前にはもらっておきたいという本音がある。これらが婚姻の時期を4月にしているのだ。

農繁期の休日には「～正月」と呼ばれるものが多い。「おしめり正月」のように思いがけない恵みの雨により休みとなる、天候に左右される休日もあれば、「総郷上り正月」のように農作業に左右される休日もある。総郷上り正月とは、千歳村の主要作物である麦の刈り取りや麦打ちが終わって一段落した時にとる休日のことで、似たような休日に、水田を主とする村が田植えを終わらせたときにとる「ウエタ上がり」がある。どちらも、その村で主となる作物の仕事がひと区切りついて初めてとることのできる休暇なので、梅雨が長引くなどの気象条件や農作業の進行具合によって毎年時

期に微妙なずれが生じるのだ。祝日が固定されていて、それに応じてさまざまな事象が動く現在とは正反対と言える。

消える風習

本論でまとめた風習の中には、農村を取り巻くさまざまな環境が変化した現在にはなくなっているものがある。化学肥料の発達・普及により下肥が使われなくなり、火事を危惧して左義長（どんど焼き）をやめた地区もある。アスファルトで舗装された公道は路普請の必要性もなくなり、「暗闇祭」とも呼ばれる府中大国魂神社の祭礼では武蔵総六所から御輿が集まることもなくなった。その他、農事にかかわる厄除けの祭も姿を消したり形骸化したりしている。

すべてがそれぞれの理由からその姿を消していったのだが、ただひとつだけ共通点がある。それは、あたりまえのことではあるが、「時代に合わなくなった」という事実である。戦後の焼け野原から見事復興し、先進国の仲間入りをして新しい時代を迎えた日本は、農業などの第一次産業を主体とした時代から第二次、三次産業を主体とした時代へと移った。おそらくその短期間で膨大な量のモノを獲得したに違いないが、その裏で失われた風習があることを忘れてはならない。

まとめ

明治時代の農村風景を構築していた風習は、当然のことではあるがやはり明治時代の農業を軸としていた。農村で見られる機械といえば、東京から来た車くらいしかなかった時代である。すべてが手作業で、肥料も有機肥料しかなかったような時代である。昭和や平成、江戸の風景がそこに広がっているはずがない。

明治時代における人と自然との関係は農業を介してつながっていた。この「人・自然・農業」という3者の関係があって初めて、『みみずのたはこと』に描かれた風習や風景が現れたのだ。農業がすたれつつある、すなわちこの関係が崩れている現代では、その代役を早急にみつけることで新しい関係を構築することが重要な課題である。